

茨城県教育財団文化財調査報告第217集

篠崎 A 遺跡

阿見吉原土地地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書 I

平成 16 年 3 月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第217集

しの ざき
篠崎 A 遺跡

阿見吉原土地区画整理事業地内
埋蔵文化財調査報告書 I

平成 16 年 3 月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

現在建設が進められている一般国道468号首都圏中央連絡自動車道は、都心から半径40～60kmの位置に計画されている総延長300kmの自動車専用道路で、阿見町はその計画路線に入っており、さらにインターチェンジの設置が予定されております。

阿見吉原土地区画整理事業は、その自動車道建設に伴って周辺部の開発を図り、当地域及び周辺地域の活性化を目的として計画されたもので、その予定地内には篠崎A遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県竜ヶ崎土木事務所から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年12月から平成15年1月まで篠崎A遺跡の発掘調査を実施しました。

本書は、篠崎A遺跡の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県竜ヶ崎土木事務所から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、阿見町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤 佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県竜ヶ崎土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成14年度に発掘調査を実施した茨城県稲敷郡阿見町大字吉原字篠崎に所在する篠崎A遺跡（L05）の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成14年12月1日～平成15年1月31日
整 理 平成15年9月1日～平成15年9月30日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久のもと、調査第一課第1班長鯉淵和彦、首席調査員山口厚、調査員小林健太郎が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、調査員小林健太郎が担当した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第K系座標に準拠し、X軸=-1,920m、Y軸=+36,400mの交点を基準点(A1a1)とした。なお、この原点は日本測地系によるものである。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに小調査区も同様に北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は大調査区の名称を冠し、「A1a1」「B2b2」のように呼称した。

- 2 抄録の北緯および東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付けて併記した。
3 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次の通りである。

遺構 住居跡—SI 土坑—SK ビット—P

遺物 拓本土器—TP 土製品—DP 石器・石製品—Q 金属製品—M

土層 攪乱—K



焼土・施軸



織維土器



甕部材・粘土・黒色処理



油煙



硬化面

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
- 5 遺構・遺物実測図の掲載方法については、以下のとおりである。
- (1) 遺構全体図は500分の1とし、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
 - (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺とした。
- 6 「主軸」は、竈を持つ堅穴住居については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。
- 7 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
- (1) 計測値の()内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を示し、単位はcm・gである。
 - (2) 備考の欄は、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

抄 録

ふりがな	しのぎ							
書名	篠崎 A 遺跡							
副書名	阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第 217 集							
著者名	小林 健太郎							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和 1 丁目 356 番地の 2 TEL 029 (225) 6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和 1 丁目 356 番地の 2 TEL 029 (225) 6587							
発行日	2004 (平成16) 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
篠崎 A 遺跡	茨城県稲敷郡阿見町大字吉原字篠崎2315番地の1	8443 - 117	35度 58分 59秒 〔35度 59分 10秒〕	140度 14分 15秒 〔140度 14分 03秒〕	20 ~ 25m	20021201 ~ 20030131	2,960㎡	阿見吉原土地区画整理事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
篠崎 A 遺跡	集落跡	平安	聖穴住居跡		6軒	土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品	平安時代を中心とする集落跡である。遺物としては住居跡から油煙が付着した土器の出土が多くみられる。	
			土坑		1基			土師器、須恵器、灰釉陶器
	中世	土坑		4基	土師質土器、陶器、石製品、鉄製品			
その他	縄文	古墳	土坑		3基	縄文土器片 土師器、石製品 陶器		

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 平安時代の遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
(2) 土坑	20
2 中世の遺構と遺物	21
(1) 土坑	21
3 その他の遺構と遺物	25
(1) 土坑	25
(2) 遺構外出土遺物	27
第4節 まとめ	28
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県竜ヶ崎土木事務所は、稲敷郡阿見町吉原地区において、区画整理事業を進めている。

平成5年12月17日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長あてに、阿見吉原区画整理事業地内における埋蔵文化財の有無とその取り扱いについて照会し、これを受けて、茨城県教育委員会は、平成8年度に事業地内の現地踏査、平成11年1月20日から22日、26日から29日にかけて試掘調査を実施した。その結果、開発予定地内において篠崎A遺跡の存在を確認し、平成11年3月18日、茨城県教育委員会教育長から茨城県知事（都市整備課扱い）にその旨を回答した。平成14年2月28日、竜ヶ崎土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長あてに、篠崎A遺跡について、文化財保護法第57条の3に基づく土木工事等の通知が提出された。平成14年2月28日、茨城県教育委員会教育長から、竜ヶ崎土木事務所長あてに工事により埋蔵文化財に影響が及ぶことから、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成14年3月20日、竜ヶ崎土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、事業地内における埋蔵文化財（篠崎A遺跡）の発掘調査の実施について協議書が提出された。平成14年3月28日、茨城県教育委員会教育長は竜ヶ崎土木事務所長あてに発掘調査の範囲及び面積等について回答し、調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。竜ヶ崎土木事務所長と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘に関する業務の委託契約を結び、篠崎A遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

篠崎A遺跡の調査は、平成14年12月1日から平成15年1月31日までの2か月間実施した。以下、調査の経過について、概要を表で記載する。

工程	12月	1月
調査準備 表土除去 遺構確認	[Shaded area]	
遺構調査	[Shaded area]	
遺物洗浄 注記作業 写真整理	[Shaded area]	
補足調査 及び 撤収		[Shaded area]

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

篠崎A遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字吉原字篠崎2315番地の1に所在する。

阿見町周辺の地形は、利根川沿岸から霞ヶ浦沿岸にかけて広がる常総台地の一部を形成する稲敷台地の北東部と、清明川、桂川、乙戸川及び霞ヶ浦沿岸の沖積低地からなっている。台地の標高は24～30mで、台地面は上記の河川によって開析され、複雑な樹枝状の支谷が刻まれている。当遺跡の近くを流れる桂川は、阿見一区を水源として町内を南流し、牛久市井ノ岡で乙戸川に合流している。

台地の地層は、新生代第四期洪積世の時代に堆積した洪積層で覆われている。洪積層は、海成、陸成の各相を示している。貝化石を含む海成の砂層である成田層を基盤として、明確には確認できないが、その上に電ヶ崎層と呼ばれる砂礫層、さらに古東京湾の海退末期に低湿地に堆積したと考えられる常総粘土層と呼ばれる泥質粘土層、火山灰起源の関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている。

当遺跡は、阿見町南西部、桂川右岸の標高約24mの南東にのびる舌状台地縁辺部に位置している。調査前の現況は山林で、台地縁辺部には山林が広がり、平坦部は畑地として利用されている。河川流域の沖積低地は、台地と約12mの比高をもって水田が開けている。

第2節 歴史的環境

阿見町内を南流する桂川は、牛久市内で乙戸川と合流している。当遺跡の所在する桂川流域では、小野川、乙戸川、清明川流域と同様に台地上に多くの遺跡が分布している。しかし、調査された遺跡は少なく、ここでは桂川流域の遺跡と周辺の重要遺跡を取り上げる。

旧石器時代の遺跡は、桂川流域にはほとんど見られない。乙戸川流域では平成14年度に発掘調査された谷ノ沢遺跡<2>²⁾で尖頭器、細石刃、石刃核が出土しているほか、石器集中地点が確認されている。また、実穀古墳群<3>³⁾では細石刃、実穀寺子遺跡<4>⁴⁾ではナイフ形石器がそれぞれ出土している。

縄文時代の遺跡は、下原遺跡<5>⁵⁾、牛久市ナギ山遺跡<9>⁹⁾などがあり、桂川支流では手接遺跡<12>¹²⁾、吉原遺跡<13>¹³⁾などが分布している。

弥生時代の遺跡は少なく、下原遺跡、牛久市原山遺跡<11>¹¹⁾が確認されている程度であり、乙戸川流域でも道記遺跡<14>¹⁴⁾、桜立遺跡<15>¹⁵⁾が知られ、全体的に少ない傾向にある。

古墳時代の遺跡は実穀寺子遺跡、実穀古墳群、実穀寺子西遺跡<18>¹⁸⁾、下小池東遺跡<19>¹⁹⁾、下小池遺跡<20>²⁰⁾などがあり、広範囲にわたって集落跡が確認されている。下小池東遺跡では、昭和53、56年の調査で中期の住居跡が13軒が確認され、第3号住居跡からは石製模造品が集中的に出土し、工房跡とも考えられている。また、実穀寺子遺跡でも5世紀中葉の石製模造品が出土している。

古墳は集落に付随するように、北原古墳群<21>²¹⁾、吉原向古墳群<22>²²⁾、若栗古墳群<24>²⁴⁾、橋向古墳群<25>²⁵⁾などが位置している。

奈良・平安時代になると、全国の地方制度は国・郡・里制に改められ、阿見町周辺は信太郡に編入された。この時代の遺跡として、花房遺跡<6>⁶⁾、大日遺跡<7>⁷⁾、烏瓜台遺跡<32>³²⁾、牛久市姫神遺跡<34>³⁴⁾などが確

認されている。花房遺跡では住居跡が14軒調査されており、そのうち棚状施設を持つ住居跡が7軒ほど確認されている。大日遺跡では住居跡16軒のほか、蔵骨器が2基出土しており、周辺地域に有力者層が居住していた可能性が考えられる。当遺跡から北東方向へ直線距離約4kmに位置する烏瓜台遺跡では、台地の斜面部に9世紀前半と考えられる須恵器窯跡が確認されている⁷⁾。当遺跡から同時期の須恵器が多数出土しており、その須恵器窯の製品が供給された可能性が考えられるが、明確ではない。さらに姥神遺跡では、奈良時代の住居跡16軒、平安時代の住居跡58軒および掘立柱建物跡4棟が確認されている⁸⁾。

中世になると、乙戸川流域には上小池城跡^{（おのゑいけ）}(35)、下小池城跡(36)、桂川流域では若栗寄居館跡^{（わかぐりよいで）}(37)などが築城される。上小池城は戦国時代末期に土岐氏によって構築された城であり⁹⁾、下小池城も土岐氏の支配下におかれていたと伝えらる城で、虎口、薬研堀などが確認されている¹⁰⁾。

以上、桂川流域とその周辺遺跡の様相を見てきたが、各時代にわたって、人々の生活の痕跡が残っている。

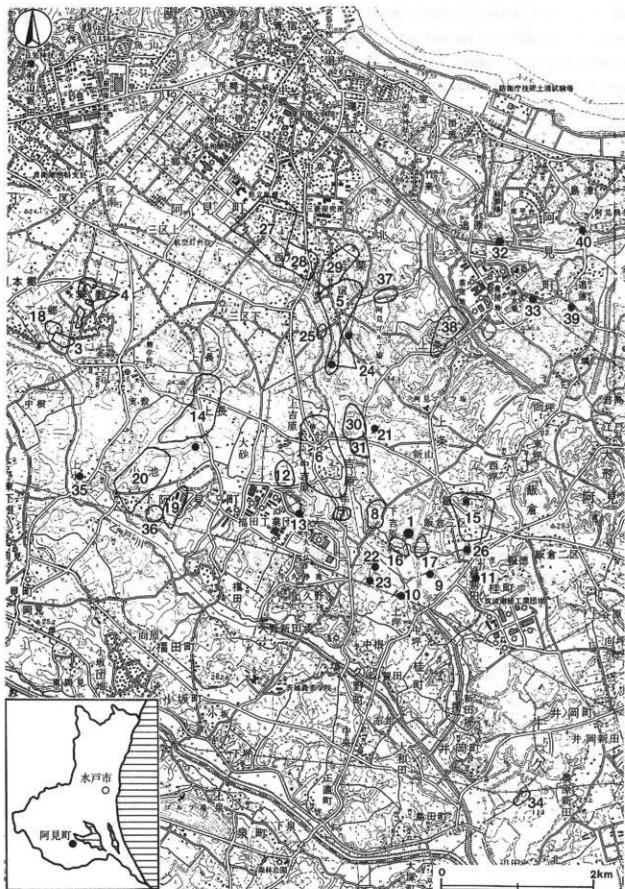
※文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図中の該当番号と同じである。

註

- 1) 綿引英樹・後藤孝行「一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書 谷ノ沢遺跡・手接遺跡・花房遺跡・大日遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第212集 2004年3月
- 2) 浅野和久「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（I） 実穀古墳群・実穀寺子遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第144集 1999年3月
- 3) 註2) に同じ
- 4) 註1) に同じ
- 5) 註1) に同じ
- 6) 阿見町教育委員会「下小池東遺跡発掘調査報告書」1979年3月
- 7) 茨城県史編纂会「茨城県史料 考古史料編奈良・平安時代」1996年3月
- 8) 奥原遺跡発掘調査会「茨城県牛久市文化財報告書 奥原遺跡発掘調査報告書」1989年12月
- 9) 阿見町史編さん委員会「阿見町史」1983年3月
- 10) 阿見町教育委員会「下小池城跡保存調査報告書」1981年11月

参考文献

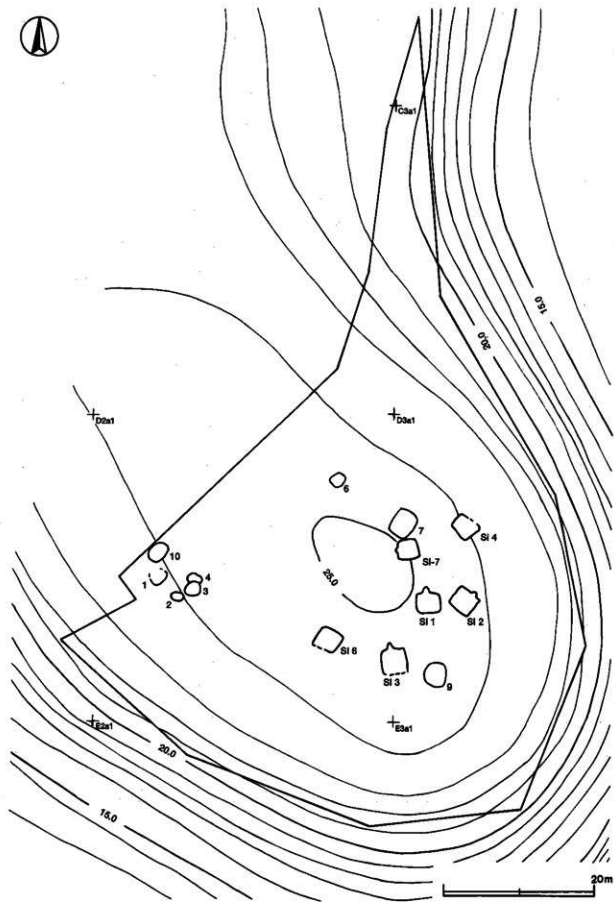
- ・茨城県教育庁文化課「茨城県遺跡地図（地名表編）」茨城県教育委員会 2001年3月
- ・茨城県教育庁文化課「茨城県遺跡地図（地図編）」茨城県教育委員会 2001年3月
- ・阿見町史編さん委員会「阿見町史」1983年3月



第1図 篠崎A遺跡周辺遺跡分布図(龍ヶ崎、土浦、佐原、玉造)

表1 篠崎A遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
1	篠崎A遺跡		○		○	○	○	○	21	北原古墳群				○			
2	谷ノ沢遺跡	○	○						22	吉原向古墳群				○			
3	実穀古墳群	○			○				23	牛頭座古墳群				○			
4	実穀寺子遺跡	○			○	○			24	若栗古墳群				○			
5	下原遺跡		○	○	○				25	橋向古墳群				○			
6	花房遺跡			○	○				26	びったら塚古墳	○			○	○		
7	大日遺跡				○	○			27	三ヶ尻遺跡					○		
8	高根遺跡		○		○	○			28	中台後遺跡					○		
9	ナギ山遺跡	○			○				29	地藏窪遺跡					○		
10	長久保道添遺跡	○							30	堂山遺跡					○		
11	原山遺跡		○	○					31	神田遺跡					○		
12	手接遺跡				○	○			32	烏瓜台遺跡				○	○		
13	吉原遺跡		○		○	○			33	諏訪寺院跡					○		
14	道記遺跡		○	○	○				34	姥神遺跡	○	○	○	○			
15	桜立遺跡			○	○				35	上小池城						○	
16	篠崎遺跡				○				36	下小池城						○	
17	薬師入遺跡				○				37	若栗寄居館跡						○	
18	実穀寺子西遺跡	○			○				38	上条城跡						○	
19	下小池東遺跡	○			○				39	蔵福寺院跡						○	
20	下小池遺跡	○			○				40	長泰寺院跡						○	



第2図 篠崎A遺跡遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

篠崎A遺跡は、今回の調査によって、平安時代から中世にかけての遺跡であることが判明した。遺構としては、平安時代の竪穴住居跡6軒、土坑1基、中世の土坑4基、時期不明の土坑3基が確認された。遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に5箱出土しており、遺物の大半は平安時代のものである。主な出土遺物は、平安時代の土師器(杯、高台付皿、甕)、須恵器(杯、盤、甕)、灰釉陶器(水瓶、長頸瓶)、土製品(支脚)、中世の土師質土器(内耳鍋、小皿)、陶器(花瓶)、鉄製品である。他には、縄文土器片、石器(磨石)・石製品(剣形模造品)、近世陶器などが出土している。

第2節 基本層序

基本層序を確認するテストピットは、調査区南東部の台地上平坦部D2c5区に設置した。地表面の標高は約24.5mで、地表面から2.2mほど掘削した。基本土層図を第3図に示した。

第1層は、暗褐色の表土層である。ローム中ブロックを微量、ローム粒子を中量含んでいる。粘性は弱く、しまりは普通で、層厚は19~31cmである。

第2層は、にぶい黄褐色のソフトローム層である。黒色粒子を微量含んでいる。ローム大ブロックを微量、ローム小ブロックを少量含んでいる。粘性・しまりは普通で、層厚は12~26cmである。

第3層は、褐色のハードローム層である。黒色粒子を微量、赤色粒子を少量含んでいる。粘性は普通で、しまりは強く、層厚は31~50cmである。

第4層は、褐色のハードローム層である。第3層より色調がやや暗い。粘性・しまりともに普通で、層厚は7~27cmである。

第5層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。黒色粒子・赤色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、しまりは普通で、層厚は8~30cmである。

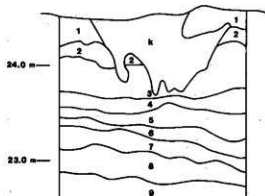
第6層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。黒色粒子を微量含んでいる。第5層より色調がやや暗い。粘性は強く、しまりは普通で、層厚は3~19cmである。

第7層は、褐色のハードローム層である。黒色粒子・白色粒子を微量含んでいる。粘性・しまりともに普通で、層厚は9~26cmである。

第8層は、にぶい褐色のハードローム層である。黒色粒子を微量、粘土粒子を多量含んでいる。粘性・しまりともに極めて強く、層厚は15~34cmである。

第9層は、灰白色の粘土層である。黒色粒子を微量含んでいる。粘性・しまりともに極めて強い。下層は未掘のため、本来の厚さは不明である。

第3図からも分かるように、北東に行くに従って各層



第3図 基本土層図

が傾斜を示しており、D2i3付近では表土から粘土層までの深さが50cm程度であるのに対し、平坦地から約4m下がったC3a1付近では表土から1m以上掘り下げたところでローム層が確認されている。

以上のことから、北東に向かってロームが流出している可能性があり、鍵となる層の判別はできなかった。住居跡・土坑等の遺構は、第2層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡6軒と土坑1基を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡(第4図)

位置 調査区中央部のD3g2区に位置し、南東への緩やかな斜面部に立地している。

規模と形状 長軸3.15m、短軸2.65mの長方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は48~70cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁のやや西寄りに付設されており、焚き口部から煙道部まで100cmである。壁外への掘り込みは70cmほどで、袖部は遺存していない。火床は浅い皿状のくぼみに客土して、床面と同じ高さの火床面を作出しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。第7層は竈の掘り方である。

竈土層解説

1 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・粘土粒子少量	4 赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子少量
2 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	5 明褐色	ローム粒子少量
3 褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量	6 褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量
		7 赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量

ピット 検出されていない。

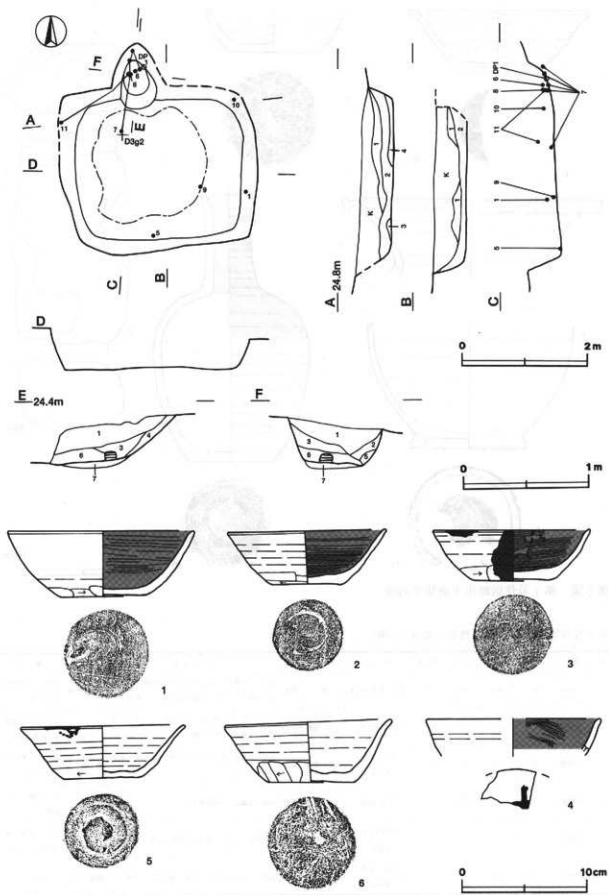
覆土 上層は攪乱を受けているが、覆土は4層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

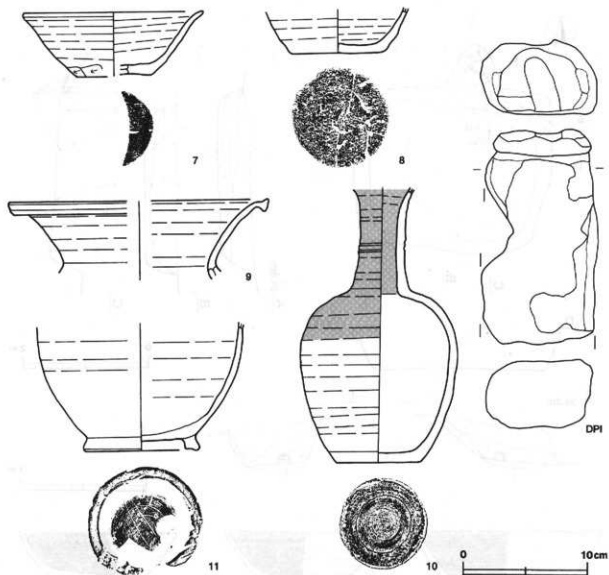
1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	3 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
2 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	4 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片322点(坏49, 甕273), 須恵器片85点(坏65, 釜5, 甕15), 灰陶陶器2点(水瓶, 長頸瓶), 土製品1点(支脚)が出土している。遺物は覆土中層から床面にかけてほぼ全域に散在しており、竈内からは逆位の状態で、上から11, 8, 7の順に重なって、竈中央よりやや東から出土している。それぞれ火熱を受けているため、火床面に支脚として据えられたものと考えられ、またDP1が倒れた状態で出土していることから、二掛の竈と考えられる。井ヶ谷78号窯式と考えられる10は北東部の覆土中層から出土しており、流れ込みの可能性が高い。

所見 時期は、床面及び竈内の出土土器から9世紀中葉と考えられる。本跡からは油煙付着土器が多く出土しており、いずれも灯明用としての使用が考えられる。灯明土器は住居内の照明に使用されるほか、仏前に灯すことにも使用されるが、当住居跡の油煙付着土器は一住居で使用する量としては多いため、寺院などに奉仕する集団の住居である可能性も考えられるが、明確ではない。



第4图 第1号住居跡・出土遺物実測図



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第4・5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	14.9	3.2	6.8	雲母・長石・石英	黒	普通	外部ロクロ整形、内部ヘラ磨き、底部回転ヘラ切り 底二方向のヘラ割り、底部下縁手持ちヘラ割り	庭裏跡中層	100%、内面塗乳、 内黒、PLA
2	土師器	坏	12.6	4.3	5.8	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	内面ヘラ磨き、底部回転ヘラ切り後、一方のヘラ 割り、底部下縁回転ヘラ割り	甕土中	100%、底部塗漆付着、内黒、PLA
3	土師器	坏	12.4	4	6.2	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	内面ヘラ磨き、底部一方のヘラ割り、底部下縁手 持ちヘラ割り	甕土中	80%、内外面塗漆 付着、内黒、PLA
4	土師器	坏	[13&]	(2.8)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	内面ヘラ磨き、口縁部鉄ナデ	甕土中	5%、器蓋「上」 内黒
5	須恵器	坏	13	4.1	6	雲母・長石 赤色粒子	黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り、底部下縁回転ヘラ割り	南壁際中央 部床面	90%、外面口縁塗 漆付着、PLA
6	須恵器	坏	13.3	5	7	長石・石英 黒色黒点	灰	普通	底部二方向のヘラ割り、底部下縁手持ちヘラ割り	甕甕土中層	100%、PLA

番号	種別	形種	口径	器高	底径	胎土	色澤	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	灰器器	杯	144	5	[60]	黄砂・長石・石英	灰黄	普通	底部一方側のヘラ張り、底部下層手持ちヘラ張り	電気床部・中央部底面	70%、PL4
8	灰器器	杯	-	[35]	7.2	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中層	50%、内外観磨耗
9	灰器器	壺	[208]	[63]	-	長石・燐	灰	普通	ロクロ整形	中央部下層	5%
10	灰陶器	水甕	-	[215]	6.8	長石	にぶい濁	普通	ロクロ整形	北東部覆土中層	90%、弁ヶ谷75号 寛式期、器外面磨 耗、PL6
11	灰陶器	長頸瓶*	-	[102]	9	長石・石英	にぶい黄濁	普通	ロクロ整形	覆土中層	10%、基盤14号 式期、内外面磨 耗、底部殘存「-」

番号	器種	高さ	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	支脚	(178)	9.3	5.4	(74.2)	土製	ヘラナゲ、底部磨	覆土中層	

第2号住居跡（第6図）

位置 調査区中央部のD3g3区に位置し、南東への緩やかな斜面部に立地している。

規模と形状 長軸3.12m、短軸2.82mの方形で、主軸方向はN-35°-Eである。壁高は56cmで、各壁とも外方に開き気味に立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、硬化面は確認されなかった。

竈 北東壁のやや東寄りに付設されており、焚き口部から煙道部まで70cmである。壁外への掘り込みは50cmほどで、天井部、袖部は遺存していない。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

覆土層解説

1 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	6 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
2 褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子少量	7 にぶい褐色	焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック少量
3 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	8 褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量
4 にぶい褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子少量	9 褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック少量
5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子少量		

ピット 検出されていない。

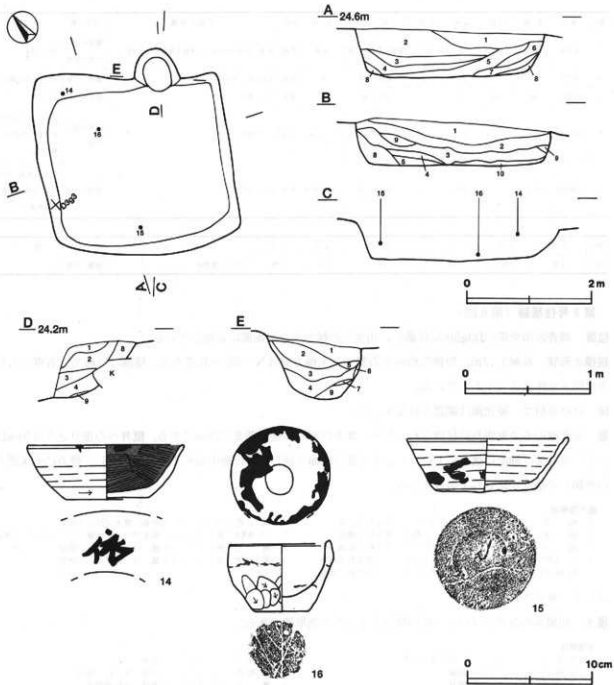
覆土 10層からなり、ブロック状の堆積を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック少量	8 褐色	ロームブロック少量、炭化物少量
4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子少量	9 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子少量
5 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子少量	10 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片29点（杯9、ミニチュア土器1、甕19）、須恵器片27点（杯25、甕2）が出土している。遺物は覆土上層から下層にかけてのほぼ全域に散在している。14の墨書土器「依」は覆土上層から出土し、埋め戻しの際の混入と考えられ、15は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉から中葉と考えられる。第1号住居跡と同様に油煙付着土器が多く出土しており、第1号住居跡との関連が想定される。



第6図 第2号住居跡・出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土器部	坏	12.5	4.3	6.4	黄母・灰石・石英	淡黄褐色	普通	内面ヘラ磨き、底部周縁ヘラ切り後、一方内へのヘラ磨り、底部下縁周縁ヘラ磨り	北西部上層	80%、口縁内外両面油磨付着、底部外周面磨着(灰)、内底、FL3
15	灰器部	坏	12.6	4.3	8.2	灰石・石英・燧石	灰	良好	外周口クロ整形、底部周縁ヘラ磨り	北西部中層	80%、底部外周面油磨付着、FL4

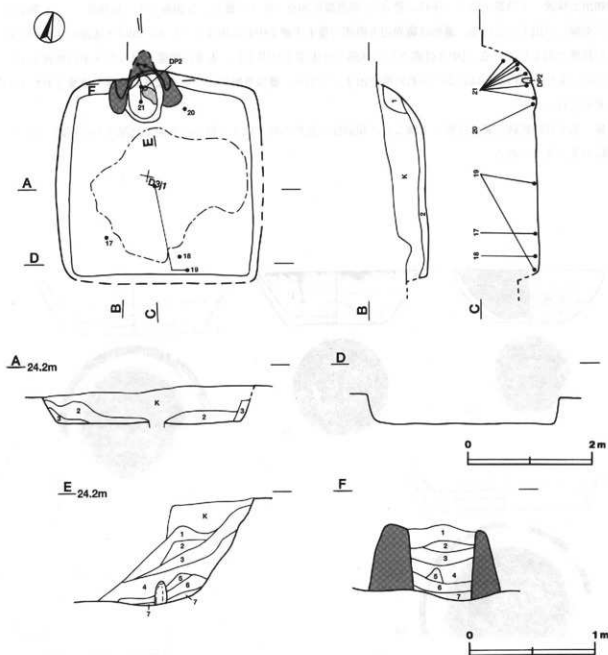
番号	種別	図 様	口 径	器 高	底 径	土 質	色 澤	成 成	手法の特徴	出土位置	備 考

第3号住居跡（第7図）

位置 調査区中央部のD3J1区に位置し、南への緩やかな斜面部に立地している。

規模と形状 一辺3.32mの方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は40~85cmで、各壁とも外方に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。



第7図 第3号住居跡実測図

竈 北壁のやや西寄りに付設されており、焚き口部から煙道部まで110cmである。壁外への掘り込みは38cmほどで、両袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火床面は火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|--------|---------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック少量 | 4 灰褐色 | 粘土ブロック・焼土ブロック多量 |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック中量、ロームブロック微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 灰褐色 | 粘土粒子多量、焼土粒子少量、ロームブロック微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| | | 7 灰褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック微量 |

ピット 検出されていない。

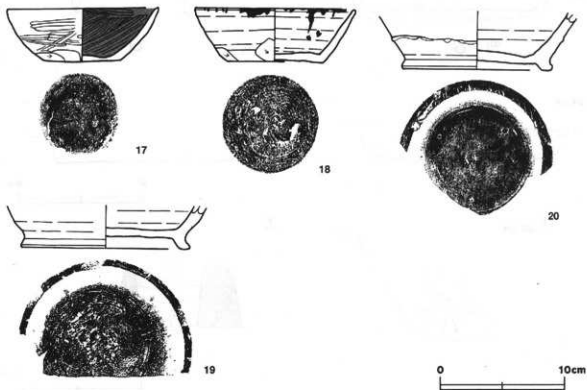
覆土 上層は攪乱を受けているが、3層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

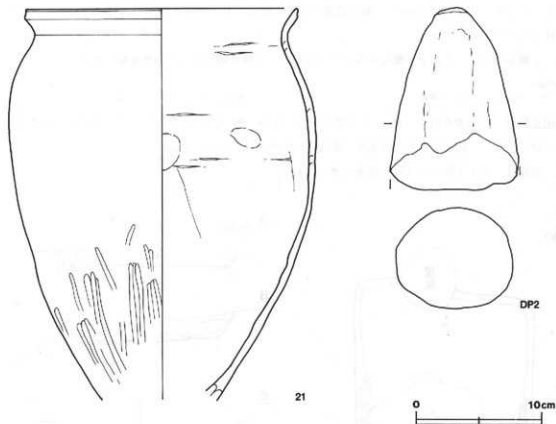
- | | | | |
|-------|------------------------|------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 3 褐色 | ローム粒子多量、焼土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片63点(坏12, 甕51), 須恵器片20点(坏9, 甕9, 長頸瓶カ1, 短頸壺1), 土製品1点(支脚)が出土している。遺物は竈周辺と南部の覆土下層を中心に出土している。20は火床部の手前から正位の状態出土している。DP2は直立した状態で火床部より出土し、本来の機能を保ったままの状況を示している。また、竈内からは21がつぶれた形で出土しており、甕は支脚にかかったままの状態に遺棄されたものと考えられる。

所見 第1号住居跡と竈の位置や主軸などに類似性が認められ、出土土器からも時期は第1号住居跡と同じ9世紀中葉と考えられる。



第8図 第3住居跡出土遺物実測図(1)



第9図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表(第8・9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
17	土師器	坏	12.1	4.3	6.3	長石・石英	橙	普通	内・外面ヘラ磨き、底部下縁手持ちヘラ削り	南西廊下層	100%、内外面磨肌、内底、PL5
18	須恵器	坏	12.9	4.2	7.8	黒輝・長石・石英 赤色粒子	にぶい黄緑	普通	底縁斜転ヘラ切り、底部下縁回転ヘラ削り	南壁廊下層	100%、内外面口縁磨滅層付着、PL4
19	須恵器	短頸瓶	-	(3.4)	[13.4]	長石・石英	灰	普通	ロクロ整形	中央廊下層・南壁廊下層	10%
20	須恵器	長頸瓶	-	(4.6)	[12.0]	長石・石英・黒輝	暗緑赤褐	普通	ロクロ整形	電子前室側	10%
21	土師器	甕	21.6	(31.1)	-	黒輝・長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き、内面磨肌、ヘラナデ、髷積み肌	電子土下層	70%、PL6

番号	器種	高さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP2	支脚	(14.5)	10.2	7.9	(796.3)	土製	上面ヘラナデ、被熱痕	電子床面	50%

第4号住居跡(第10図)

位置 調査区中央部のD3d3区に位置し、東への緩やかな斜面部に立地している。

規模と形状 長軸2.86m、短軸2.73mの方形で、主軸方向はN-44°-Eである。壁高は30~42cmで、各壁とも外方に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、P1周辺が踏み固められている。壁溝が南半分のみ巡っている。

竈 捜乱により、確認できなかった。

ピット 1か所。P1は深さ54cmで、竈が設置されたと推定される位置と向かい合う位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層からなり、大部分が攪乱を受けているがレンズ状堆積を示した自然堆積である。

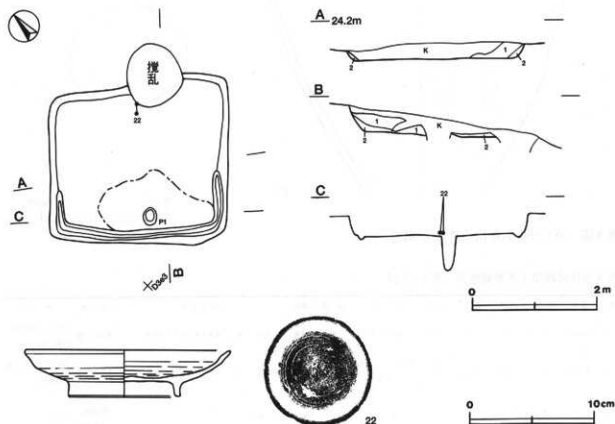
土層解説

1 褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片31点(甕), 須恵器片11点(杯9, 盤2)が出土している。大部分が攪乱を受けているため細片が多く、図示できたのは北部の床面から出土した22だけである。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第10図 第4号住居跡・出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表(第10図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色澤	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	須恵器	盤	16	3.7	6.6	薬母・灰石	にぶい黄	普通	底縁回転へう切り後、高台貼り付け	北東壁際床面	90%、P15

第6号住居跡(第11図)

位置 調査区中央部のD2h8区に位置し、南東への緩やかな斜面部に立地している。

規模と形状 長軸2.88m, 短軸2.71mの方形で、主軸方向はN-28°-Eである。壁高は46~67cmで、各壁とも外方に開き気味に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は確認できなかった。

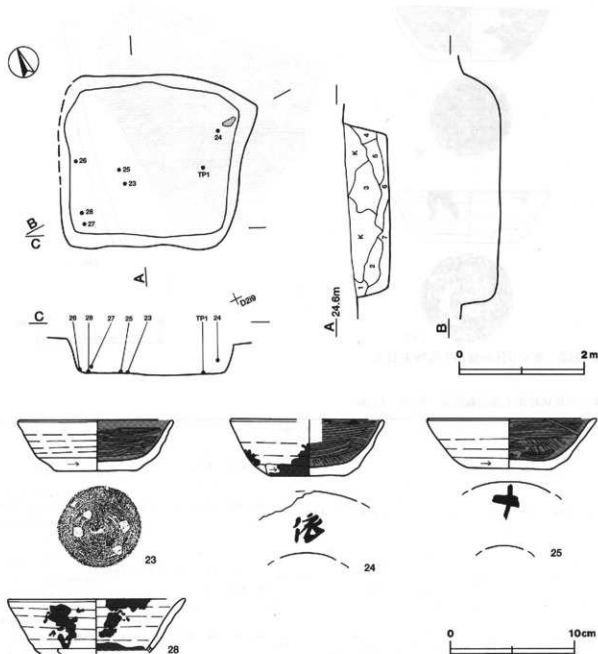
竈 東コーナー部に付設されているが、火床面の焼土は少量確認され、焚き口部から煙道部までは70cm以上と考えられる。袖部は確認されず、火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用している。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

覆土 上層は部分的に攪乱を受けている。7層からなり、ブロック状の堆積を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量 | | |

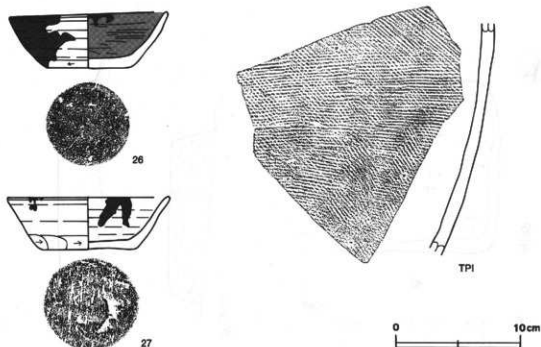
ピット 検出されていない。



第11図 第6号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片41点(杯11, 甕30), 須恵器片16点(杯13, 高台付杯2, 甕1)が覆土中層から床面にかけたの南西部に集中して出土している。24の墨書土器「依」は竈手前の覆土中層から出土しており, 25の墨書土器「十」は中央部の床面から正位の状態で出土している。また, 23, 26, 28, TP1は床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は出土土器から9世紀中葉と考えられる。また, 第1号住居跡からも「十」の墨書土器が出土し, さらに第2号住居跡からは「依」の墨書土器が出土しており, 当住居跡との関連が想定されるが明確ではない。



第12図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表(第11・12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色質	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
23	土師器	杯	122	4	6.3	灰石・石英	にぶい黄緑	普通	内面へう磨き, 口縁磨きナシ, 底部回転へう切り, 体部下端回転へう磨り	中央部床面	90%, 内面磨耗, 内黒, PL5
24	土師器	杯	[124]	4.4	6	霏母・石英	浅黄緑	普通	内面へう磨き, 底部回転へう切り, 体部下端回転へう磨り	竈手前覆土中層	80%, 内面口縁, 外面口縁から底部油取付者, 体部外面磨き「依」, 内黒, PL5
25	土師器	杯	134	4	6.8	灰石・石英 赤色粒子	にぶい黄緑	普通	内面へう磨き, 体部口縁磨き, 底部回転へう切り, 体部下端回転へう磨り	中央部床面	90%, 体部外面磨き「十」, 内黒, PL5
26	土師器	杯	126	4.3	6.8	灰石・石英 赤色粒子	にぶい黄	普通	内面へう磨き, 体部口縁磨き, 体部下端回転へう磨り	北西壁際床面	100%, 内外面磨耗, 内面口縁部, 外面体部油取付者, 内黒, PL4
27	須恵器	杯	13	4.2	7.4	霏母・灰石・石英	黒褐色	普通	底部回転へう切り後, 二方向のへう磨り, 体部下端手磨りへう磨り	溝底壁際下層	100%, 内外面油取付者, PL4

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
28	磁器器	杯	142	(43)	-	黄砂・長石・石英 白色粒子	灰	普通	口テロ彫彫	東西壁断面	70%、内外表面施 付露
TP1	磁器器	大甕	-	(182)	-	長石・石英	灰	良好	鉢部外面のみ、内面は裏面	東西断面	

第7号住居跡 (第13図)

位置 調査区中央部のD3e1区に位置し、北東への緩やかな斜面部に立地している。

規模と形状 長軸2.57m、短軸2.43mの方形で、主軸方向はN-98°-Wである。壁高は19~29cmで、各壁とも外方に閉き気味に立ち上がっている。

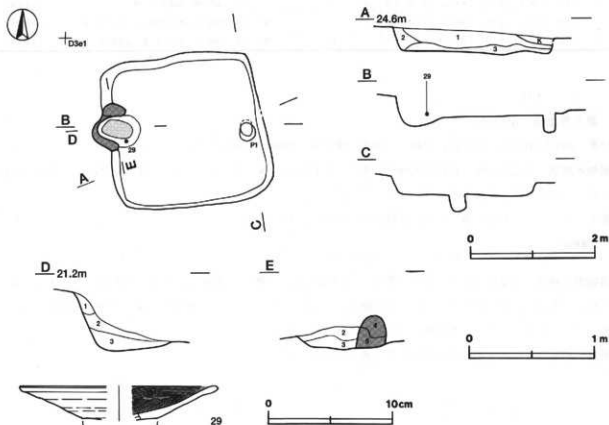
床 はほぼ平坦で、硬化面は確認できなかった。

竈 西壁の中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで77cm、壁外への掘り込みは25cmほどである。第4・5層は袖部であり、床面と同じ高さの地山面に黑色主体の土を積み、さらに上には砂質粘土を貼って構築している。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火床面は火熱を受けて赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・砂少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 4 暗褐色 砂中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 5 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色 焼土ブロック・砂少量、ロームブロック・炭化粒子微量

ピット 1か所。P1は深さ27cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第13図 第7号住居跡・出土遺物実測図

覆土 3層からなり、ブロック状の堆積を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック・炭土ブロック微量 3 褐色 ロームブロック中量、炭化物少量
 2 褐色 ロームブロック中量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片34点(坏27, 高台付皿1, 甕6), 須惠器片9点(坏)が出土している。遺物は全面から出土しているが、いずれも細片のため図示できたのは29点であり、竈の覆土中層から正位の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器からみて9世紀中葉と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表(第13図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	質感	手造の特徴	出土位置	備考
29	土師器	高台付皿	[158]	27	-	黄赤・灰石	橙	普通	底縁斜縁へつ切り後、高台縁り付け、内面へつ磨き	覆土中層	50%、高台縁欠損 内黒

表2 平安時代住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	内部施設					土質	主な出土遺物	備考 (時期)
						竈	土灶	仏壇	E+	竈穴			
1	D3g2	N-3°-E	長方形	3.15×2.65	48-70	平煎	-	-	-	-	雑土	土師器(坏・甕)、須惠器(坏・甕)、灰陶陶器(水甕)	9世紀中葉
2	D3g3	N-25°-E	方形	3.12×2.82	56	平煎	-	-	-	-	雑土	土師器(坏・ミニチュア土器・甕)、須惠器(坏)	9世紀前半-中葉
3	D3j1	N-15°-W	方形	3.32×3.32	40-85	平煎	-	-	-	-	自然	土師器(坏・甕)、須惠器(坏・甕)	9世紀中葉
4	D3d3	N-44°-E	方形	2.86×2.73	30-42	平煎	一部	1	-	-	自然	土師器(甕)、須惠器(坏・甕)	9世紀後半
6	D2k8	N-25°-E	方形	2.88×2.71	46-67	平煎	-	-	-	-	雑土	土師器(坏・甕)、須惠器(坏・高台付坏・甕)	9世紀中葉
7	D3e1	N-65°-W	方形	2.57×2.43	19-29	平煎	-	1	-	-	雑土	土師器(坏・高台付皿・甕)、須惠器(坏)	9世紀中葉

(2) 土坑

第9号土坑(第14図)

位置 調査区南東部のD3i2区に位置し、南東へ傾斜する台地の東端部に立地している。

規模と形状 長径3.10m, 短径2.87mの円形で、長径方向はN-4°-Eである。深さは16cmで、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して緩やかに立ち上がっている。

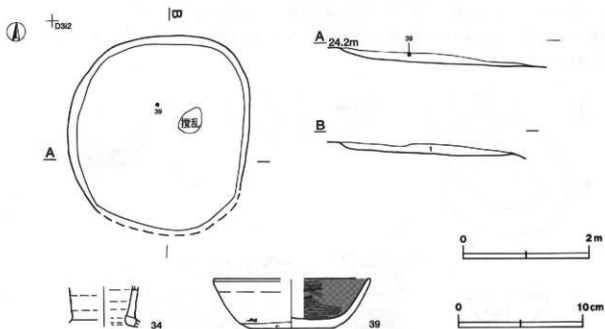
覆土 単一層で、層厚も薄いため、堆積状況の詳細は不明である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、黄土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片67点(坏9, 甕58), 須惠器片4点(甕), 灰陶陶器片13点(長頸瓶)が中央部の覆土下層から床面にかけて出土している。34は攪乱から出土しているが、同一個体片が覆土下層から床面にかけて散らばって出土しており、本遺構に伴うものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第14図 第9号土坑・出土遺物実測図

第9号土坑出土遺物観察表(第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色澤	構成	手法の特徴	出土位置	備考
39	土師器	坏	[126]	39	[68]	長石・石英 赤色粒子	にぶい橙	普通	内面へう割り, 底部一方向のへう割り, 底部下縁田 版へう割り	覆土中層	40%, 外面油漉付 着, 内外面磨耗, 内照
34	瓦物陶器	長頸瓶	-	[32]	-	長石	淡黄	良好	ロクロ成形	覆土中	10%, 第14号溝 式期

2 中世の遺構と遺物

今回の調査で, 当調査区からは8基の土坑が確認されているが, その中で遺物などから中世と思われる土坑は4基検出されている。以下, 検出された遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑

第3号土坑(第15図)

位置 調査区南西部のD2f4区に位置し, 台地の平坦部に立地している。

重複関係 第4号土坑の南部を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.17m, 短径1.80mの楕円形で, 長径方向はN-60°-Eである。深さは82cmで, 中・下層に粘土を貼っており, 底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 9層からなり, 第7・9層は粘土層であり, 堆積状況は人為堆積である。

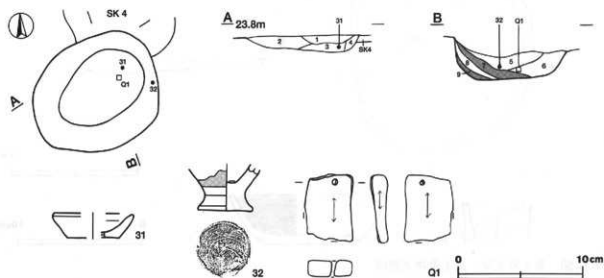
土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|----------|---------------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 7 にぶい褐色 | 粘土ブロック多量, ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量・粘土ブロック少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 | 9 にぶい橙褐色 | 粘土粒子多量, ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片34点(坏7, 甕27), 土師質土器片1点(小皿), 陶器1点(花瓶), 石製品1点(砥

石) が出土している。31は覆土上層, 32, Q1は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 中世と考えられる第4号土坑の南部を掘り込んでおり, 出土土器からも時期は中世と考えられる。また, 出土遺物から基壇と考えられる。



第15図 第3号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
31	土師灰土器	小瓶	[62]	2	[42]	灰石・石英	黄	普通	内・外面磨耗のため不明	覆土上層	40%, 内外面磨耗
32	陶器	花瓶	-	(3.7)	4.4	褐色	灰ヤラーブ質 に灰・黄鉄	良好	磁器回転糸切り	覆土中層	30%, 古瀬戸, PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(5.3)	3.9	1.3	(34.0)	砂板岩	3面使用	覆土中層	PL6

第4号土坑 (第16図)

位置 調査区南西部のD2f4区に位置し, 台地の平坦部に立地している。

重複関係 第3号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.94m, 短軸1.20mの不定形で, 長軸方向はN-60°-Wである。深さは18cmで, 底面には凹凸がみられ, 壁は外傾して緩やかに立ち上がる。

覆土 2層からなり, レンズ状の堆積を示した自然堆積である。

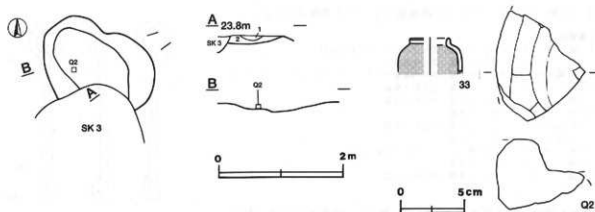
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片17点 (坏4, 甕13), 陶器片1点 (小壺), 石製品1点 (石臼) が出土している。Q2は床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中世と考えられる。



第16図 第4号土坑・出土遺物実測図

第4号土坑出土遺物観察表(第16図)

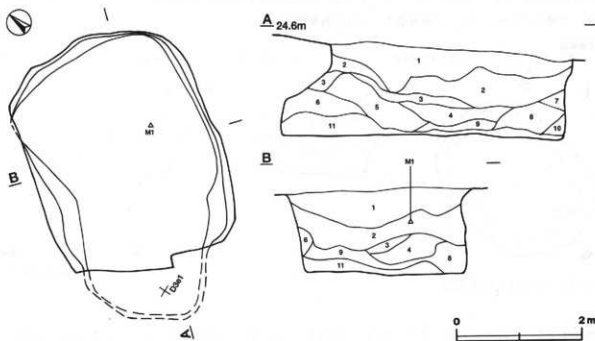
番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地紋	手技の特徴		出土位置	備考
									内外周地輪			
33	陶器	小皿	(30)	(28)	-	緻密	黒	普通			覆土中	20% 鉄粒

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	石臼	(88)	(70)	(3.5)	(235.4)	凝灰岩	作業面斜削痕	中央部床面	20% PL6

第7号土坑(第17図)

位置 調査区南西部のD3d1区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸4.65m、短軸3.06mの不整形長方形で、長軸方向はN-40°-Eの地下式墳である。深さは125~148cmで、底面はほぼ平坦であり、南西壁を除く壁はやや外傾しながら直立気味に立ち上がり、天井部は崩落し、第11層が崩落土である。南西壁はオーバーハングしている。

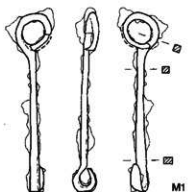


第17図 第7号土坑実測図

覆土 11層からなり、ブロック状堆積を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック多量、炭化物微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 4 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック多量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量
- 9 褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量
- 10 褐色 ロームブロック中量
- 11 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量



第18図 第7号土坑出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片57点(坏5, 甕52), 須恵器片12点(坏8, 甕4), 陶器片1点, 鉄製品1点(引手)が出土している。各遺物は覆土上層から中層にかけて出土しており、いずれも混入したものと思われる。中央部の覆土中層から引手の一部(M1)が出土しているが、崩落後の混入と考えられる。

所見 出土遺物は土師器, 須恵器, 陶器などが混在しており, 明確にはできないが, 時期は中世以降と考えられる。

第7号土坑出土遺物観察表(第18図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	引手	14.1	3.0	0.5	42.4	鉄	上部は折り曲げて重ね合わせている	覆土中層	PL6

第10号土坑(第19図)

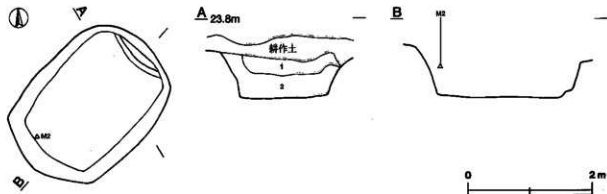
位置 調査区南西部のD2e3区に位置し, 台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸2.69m, 短軸1.94mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-44°-Eである。深さは64~75cmで, 底面はほぼ平坦であり, 壁は外傾して立ち上がっている。北東壁には段がみられる。

覆土 2層からなり, ブロック状堆積を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量
- 2 褐色 ロームブロック多量

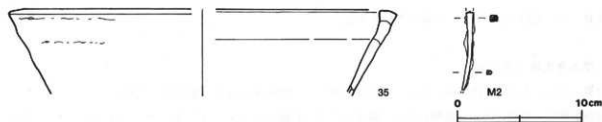


第19図 第10号土坑実測図

遺物出土状況 土師器片45点(坏1, 甕44), 須恵器片1点(甕), 土師質土器片1点(内耳土器), 鉄製品1点(釘)が出土している。遺物は階段状の段の周辺にはなく, 北東部から散在して出土している。これらは覆

土上層からの出土であり、いずれも混入したものである。

所見 出土遺物が少なく、各遺物も覆土上層からの出土であり、時期は中世と考えられる。



第20図 第10号土坑出土遺物実測図

第10号土坑出土遺物観察表 (第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	土質	色調	焼成	手注の特徴	出土位置	備考
35	土製土器	内耳土器	[28.6]	[6.8]	-	赤埴・灰石・石英	灰青陶	普通	口縁内・外面磨ナデ。係部内・外面ナデ	覆土中	5%, 保存書

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	釘	(6.2)	0.3-0.6	0.3-0.5	(5.2)	鉄	両端欠損。先端鋭曲	覆土上層	75.6

3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明らかでない土坑3基が検出されている。以下、遺構及び遺物について記載する。

(1) 土坑

第1号土坑 (第21図)

位置 調査区南西部のD2f3区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長径2.35m、北部は調査区域外であり短径は1.20mだけが確認された。形状は楕円形で、長径方向はN-62°-Eである。深さは30cmで、底面はほぼ平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 1か所。深さは25cmで、中央部やや南寄りに位置している。

覆土 7層からなり、ブロック状堆積を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 5 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 6 灰褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量 | 7 褐色 | ロームブロック多量、粘土ブロック微量 |
| 4 灰褐色 | ロームブロック多量、粘土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 出土していない。

所見 出土遺物がないため、時期は不明である。

第2号土坑 (第21図)

位置 調査区南西部のD2f3区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長径1.50m、短径1.10mの楕円形で、長径方向はN-90°-Eである。深さは20cmで、底面はほぼ平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層からなり、ブロック状堆積を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量
3 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土していない。

所見 出土遺物がないため、時期は不明である。

第6号土坑 (第21図)

位置 調査区中央部のD2c9区に位置し、北東に緩やかに傾斜する台地の北端部に立地している。

規模と形状 長軸1.75m、短軸1.70mの隅丸方形で、長軸方向はN-44°-Eである。深さは24cmで、底面はほぼ平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

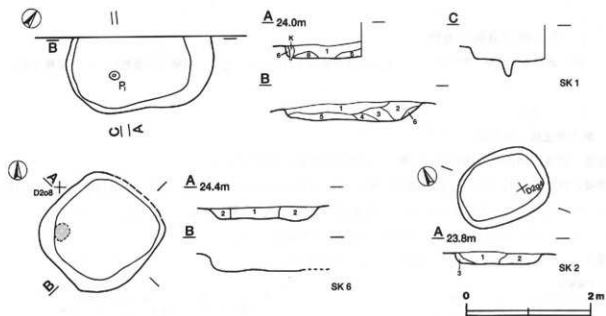
覆土 2層からなり、ブロック状堆積を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・灰少量
2 褐色 ロームブロック中量、灰少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 出土遺物がないため、時期は不明であるが、人為堆積であることと、少量の灰が確認されていることなどから墓塚の可能性が考えられる。



第21図 第1・2・6号土坑実測図

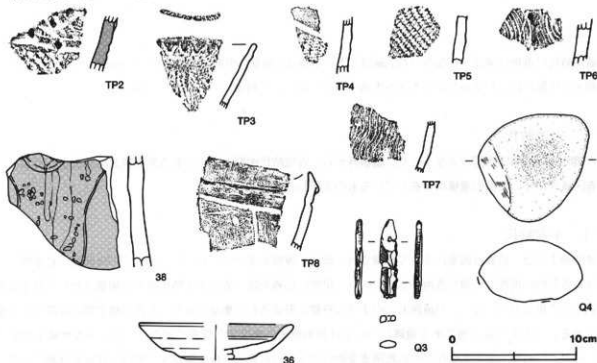
表3 土坑一覧表

土坑 番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
1	D 2 c 9	N-45°-E	隅方形	2.25×1.20	30	外傾	平坦	人為		
2	D 2 c 9	N-60°-E	隅方形	1.50×1.10	30	外傾	平坦	人為		
3	D 2 f 4	N-40°-E	隅方形	2.17×1.80	82	外傾	平坦	人為	土製瓦片、陶器片、磁石	中世、SK4→本誌
4	D 2 f 4	N-40°-W	不定形	(1.94)×1.20	18	縦斜	凹凸	自然	陶器片、石臼	中世、本誌→SK3
6	D 2 c 9	N-44°-E	隅丸方形	1.75×1.70	24	外傾	平坦	人為		
7	D 3 d 1	N-40°-E	不整形長方形	4.65×3.06	125~148	直立	平坦	人為	土製瓦片、磁器器片、陶器片、引手	中世

土坑 番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
9	D 3 2	N-4°E	進行形	3.10×2.87	16	横割	平照	自然	土師器 灰土器、灰土器部	9世紀中葉
10	D 2 c1	N-46°E	隅丸長方形	2.68×1.94	64~75	内傾	平照	人為	土師器土器片、釘	中葉

(2) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない主な遺物について、遺物観察表で記述する。



第22図 遺構外出土遺物実測図

遺構外遺物観察表 (第22図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP2	縄文土器	深鉢	-	(43)	-	長石・繊維	灰褐色	普通	手取竹管による沈線文。交叉部に縦状突起を付す。底部はR.Lの早期縄文を横方向に施文	表土中	前期後半, TP6
TP3	縄文土器	深鉢	-	(53)	-	雲母・長石	黒	普通	貝殻線文	S2覆土中	前期後半, TP6
TP4	縄文土器	深鉢	-	(43)	-	雲母・長石 赤色粘土	にぶい橙	普通	沈線区画内にR.Lの早期縄文	表土中	中期後半, TP6
TP5	縄文土器	深鉢	-	(33)	-	雲母・長石	橙	普通	R.Lの早期縄文を横方向に施文	表土中	中期後半, TP6
TP6	縄文土器	深鉢	-	(38)	-	雲母・長石 赤色粘土	橙	普通	製器状工具による縦位の波状線文	表土中	前期後半, TP6
TP7	縄文土器	深鉢	-	(44)	-	雲母・長石	明黄褐色	普通	製器状工具による縦位の波状線文	表土中	前期後半, TP6
TP8	縄文土器	深鉢	-	(62)	-	雲母・長石	にぶい黄褐色	普通	口沿部は無文帯。胴部は縦位の沈線区画内に薄高状工具による線文を先施	S2覆土中	後期前半, TP6
36	陶器	皿	[124]	27	[58]	にぶい橙	オリブ黄 にぶい黄褐色	良好	古瀬戸	表土中	40%, PL6
38	陶器	鉢	-	(36)	-	にぶい黄褐色	浅黄	普通	瀬戸・筑前系	表土中	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	刺形品	(62)	1.4	0.6	(8.1)	滑石	基部に小孔	表土中	PL6
Q4	磨石	(85)	8.9	(5.0)	(412.4)	安山岩	左側面に使用痕	表土中	PL6

第4節 ま と め

今回の調査によって、平安時代の堅穴住居跡6軒・土坑1基、中世の土坑4基、時期及び性格不明の土坑3基を検出した。また、出土遺物は縄文土器片から近世の陶器片と多時期にわたっている。ここでは、それぞれの時期の遺構と遺物について概要を述べ、まとめとしたい。

1 縄文時代

縄文時代の遺構は確認できなかった。確認できた土器は、前期、中期、後期のものである。以上のことから、前期から後期には、わずかながら人々が生活の場の一部として利用していたことが窺える。

2 古墳時代

古墳時代の遺構は確認できなかった。遺構外から、古墳時代中期と考えられる剣形模造品が出土しており、調査区域外にこの時期の遺構が存在しているものと思われる。

3 平安時代

律令制下では、仏教は国家によって統制され、厳しい規制を受けていた。しかし、その反面で「私度僧」と呼ばれる私的に得度した僧が各地のムラに入り、民衆に仏教を説く姿が平安時代初めに編纂された『日本霊異記』などに描かれている¹⁾。当遺跡もこのような時期に形成された集落であり、舌状台地突端に位置する小集落である。このような立地にある遺跡については菟田農民の季節的な作業小屋などいろいろな性格が想定される²⁾が、灯明用土器や水瓶などの仏教関連遺物の出土から仏教に密接に関連する集団の存在も推測できる。

当遺跡の遺物は9世紀前半から中葉に限られ、いずれも油煙付着土器が多く、同一の血縁的集団によって形成された集落であると考えられる。土師器杯19点中11点(57.9%)、須恵器杯28点中9点(32.1%)にそれぞれ油煙の付着が認められ³⁾、集落内でこれだけの油煙付着土器が出土しているということや孤立した集落と想定されることなどから、調査区域内に寺院跡や仏堂跡は確認できなかったが、寺院に付属する専従集団の可能性も想定され、さらに僧侶の修行場や居住域の一部である可能性も考えられる。

4 中世・近世

中世の遺構として土坑4基が確認された。そのうち粘土を貼った土坑は類例などから墓壇の可能性があり、段を有した土坑も出土遺物から墓壇の可能性もある。また、第7号土坑はいわゆる地下式墳である。近世は遺構が伴わず、陶器片が一片出土しているのみであった。

註

- 1) 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館『仏堂のある風景』 栃木県教育委員会 1999年
- 2) 茨城県史編纂委員会『茨城県史 原始古代編』 1985年3月
- 3) 流れ込み、混入の遺物を取り上げるにあたって、個体数の計算は口縁部を中心に形状、形態から算出した。

写 真 图 版



調査区全景



第1号住居跡 完掘状況



第 1 号住居跡
竈遺物出土狀況



第 1 号住居跡
遺物出土狀況



第 2 号住居跡
完掘狀況

第3号住居跡
完掘状況



第3号住居跡
竈完掘状況



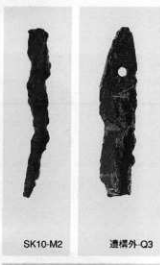
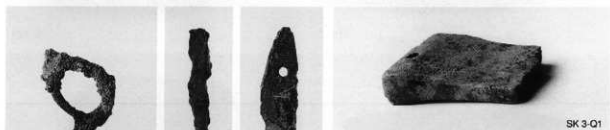
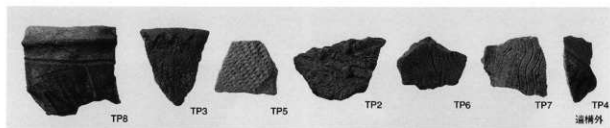
第7号土坑
完掘状況







出土土器（土師器、須恵器、墨書土器）



出土土器（縄文、陶器、土師器），石製品（砥石、石臼、磨石、刺形品），鉄製品（引手、釘）

茨城県教育財団文化財調査報告第217集

篠崎A遺跡

平成16(2004)年3月24日印刷

平成16(2004)年3月26日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 ㈲平電子印刷所
〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13
TEL 0246-23-9051